

高等学校学習指導要領（外国語編・英語）に見る 辞書指導に関する一考察

(1)昭和22年試案から昭和35年改訂版まで

寺 嶋 健 史

松 山 大 学
言語文化研究 第34巻第2号（抜刷）
2015年3月

Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 34 No. 2 March 2015

高等学校学習指導要領（外国語編・英語）に見る 辞書指導に関する一考察

(1)昭和 22 年試案から昭和 35 年改訂版まで

寺 嶋 健 史

1. は じ め に

平成 20 年に中学校学習指導要領が公示されたのに続き、翌平成 21 年に高等学校の学習指導要領が公示された。寺嶋（2012）では、この学習指導要領改訂のポイントの 1 つが自律的学習者育成にあることや、自律的学習に欠かせない辞書の活用が優れた言語学習ストラテジーとして認知されていることに基づいて、昭和 22 年発行の試案から平成 20 年改訂版までの中学校学習指導要領と各々の解説書に見られる辞書使用および指導に関する記述の変遷を概観することで、中学校英語教育における辞書の在り方を考察している。今回は、高等学校学習指導要領に焦点を当てて、辞書に関する記述の変遷と高等学校英語教育における辞書の在り方を 2 回に分けて検証する。その 1 回目である本論では、昭和 22 年の試案から学習指導要領に法的拘束力が伴う昭和 35 年改訂版までを概観したあと、現行の平成 21 年版との比較を試みる。なお、外国語編のうち英語に関する科目のみを対象とし、仏語や独語などの英語以外の科目は調査の対象外とした。また、専門教育に関する各教科に含まれる英語（「外国語編」に対する「英語編」）では辞書に関する記述が見られないため、事実上対象外となった。さらに、辞書指導に関する項目の一部では、中学校学習指導要領の当該項目を参照するよう付記されている場合や、中学校での指導内容を前提としている場合があるが、高等学校学習指導要領の内容を扱う本論では、中学校段階

階における辞書指導への言及は最小限に留め、その詳細は寺嶋(2012)に譲り、当該項目の原文については基本的に割愛することにした。

2. 高等学校学習指導要領（外国語編）の辞書に関する記述とその変遷

昭和22年の試案から昭和35年改訂版まで計4つの学習指導要領について、全体的な特徴を概観したあと、外国語編（英語）の概要とその中で言及されている辞書に関する記述の変遷を辿る。また、各改訂版と同時期に発行された解説書の中でどのように説明されているかについても言及する。なお、本論中で引用掲載する各出典については、辞書に関する記述が含まれる部分を項目単位で抜粋し、さらに必要に応じて前略・中略・後略をしたり、掲載ページ数を付記したり、全般的なレイアウトも含めて筆者が独自に編集していることをここで断っておく。

2.1 昭和22年版 学習指導要領（試案）

2.1.1 概要

終戦を迎え戦時下の教育概念を払拭するために、文部省から出された「新教育指針」とアメリカの教育制度を参考に作られた最初の学習指導要領である。デューイの経験主義教育思想に基づいたカリキュラムが採用された。現在ののような法的拘束力が伴わない「試案」である。また、高等学校の具体的な教育課程は次回改訂まで整わなかった。

2.1.2 「英語編」の構成と辞書に関する記述

中学校と高等学校の内容が一冊にまとめられており、A5判全28ページで10の章と附録から構成されている。各章の内容は、第一章から第六章と附録は中高共通で、第七章から第九章は中学校の各学年に、第十章が高等学校にそ

れぞれ特化している。

辞書に関する記述は、第四章、第七章、第八章の 3 つの章の中で、第七学年と第八学年の「読み方」の指導事項の 1 つとして示されているが、その表記は「辞書」ではなく「字びき」である。高等学校に相当する第十学年以降には辞書に関する記述は見当たらない。

2.2 昭和 26 年版 中学校高等学校学習指導要領（試案）

2.2.1 概要

急遽短期間で作成された昭和 22 年版はあらゆる点で不十分であったことから、わずか 4 年後に改訂された。基本的には試案の趣旨である「新教育」や「経験主義」の概念が継承されている。しかし全ての教科において、解説書や資料が盛り込まれた教師用指導研究書のようなかたちになり、以降の改訂版では見られない極めて詳細な内容となっている。また、当時の外国語は選択教科であった。

2.2.2 「外国語科英語編」の構成と辞書に関する記述

日本語と英語の両言語で書かれ、A5 判 3 冊で全 759 ページに及ぶ充実ぶりである。8 つの章と 3 つの附録で構成されており、その中で辞書に関する記述は、「第 4 章 中学校における英語指導計画」「第 5 章 高等学校における英語指導計画」「第 6 章 教育課程材料の源とその学年配当」の 3 つの章で見ることができる。

高等学校に関する第 5 章で、まず「1. 高等学校第 1 学年における生徒の経験」の「B. 主として読み方に関するもの」の中で、「辞書を使うこと」という辞書使用に特化した項目がある。1 学年で辞書使用に熟達すべきとし、中学校 2・3 学年で習得した内容を踏まえて、略語、音節区分、発音記号を扱ってよいとしている。「C. 主として書き方に関するもの」では、中学校での指導内容に加えて略語の習得を促し、「D. 適当な単語その他の遊び」では単語を

使った遊びの中で辞書を使う具体的事例が紹介されていて、定義遊びでは英英辞典の活用にも触れている。次に「2. 高等学校第2学年における生徒の経験」では、「C. 主として書き方に関するもの」で荒筋やまとめを書く際に類語辞典等の各種辞書の活用、さらに「3. 高等学校第3学年における生徒の経験」では単語を作る遊びの中での辞書活用、がそれぞれ述べられている。

昭和26年版 中学校・高等学校学習指導要領 外国語科英語編（試案）（同年施行）

第5章 高等学校における英語指導計画

1. 高等学校第1学年における生徒の経験

B. 主として読み方に関するもの

- () 目次表・索引および用語集を使うこと

中学校第2学年および第3学年の指導計画のこの項参照。

- () 辞書を使うこと

中学校第2学年および第3学年の指導計画のこの項参照。

高等学校第1学年においては、生徒は辞書を使うことにじゅうぶん熱達すべきである。中学校第2学年および第3学年においてすでに述べた技術に次のものを加えてもよい。すなわち、(1)辞書に出て来るすべての略語を使えるように知っていること、(2)書き物および印刷物における正しい音節区分を利用する能力、および(3)発音符号の価値およびアクセントを示す符号をじゅうぶんに知ること。

- () 百科事典およびその他の参考書を用いること

中学校第3学年の指導計画のこの項参照。

C. 主として書き方に関するもの

- () 略語を正しく用いること

中学校第2学年および第3学年の指導計画のこの項参照。

必要が起るにしたがって新しい例を略語表に加えよ。また辞書を有効に使うために必要なすべての略語を習得させるべきである。

D. 適当な単語その他の遊び

同意語および反意語遊び――

教師は黒板に一連のありふれた単語を書いてひとつひとつの単語に同意語を当てさせる。学級は全体として、個人として、またはグループとして活動してもよ

い。また時間の制限をもうけてもよい。辞書の使用は許しても許さなくてもよい。
黒板に単語を書かないで、教師は謄写刷りを用意してもよい。

定義遊び——

主将はグループのひとりに英語の単語を何か言って話しかける。話しかけられた者は主将が20まで数えるうちに、その単語を定義しなければならない。それができなければその遊びから除外される。

特に日本の生徒向きに作ったやさしい定義の英英辞典を絶えず使っていると、この遊びに上達する助けとなる。

2. 高等学校第2学年における生徒の経験

C. 主として書き方に関するもの

() 荒筋やまとめを書くこと

a. 解説

高等学校第1学年の指導計画のこの項参照。

(前略) いろいろな辞書や Roget: Thesaurus of English Words and Phrases や文型一覧表などをじゅうにぶんに活用し、また、それを書く努力や結果の批評が、非常に価値があるはずである。この学習活動についていろいろと話し合い、そうすることもまたそれ自身価値がある。(後略)

3. 高等学校第3学年における生徒の経験

D. 適当な単語その他の遊び

ひとつの単語からいろいろな単語をつくりだす遊び——

(前略) かなり長い単語を選び、その単語を構成している文字だけを使って、知っているだけ多くの単語を書く。もし辞書を使ってもよいことにきまれば、生徒は辞書を使うことができる。(後略)

第6章 教育課程材料の源とその学年配当

II. 図書関係教材資料

7. 参考書類

参考書類とは、辞書・百科事典・年鑑・地図等のことで、いわゆる読む書物ではなくて参照する書物をいう。英語の学習指導は、参考書類の利用いかんによって、その効果をいちじるしくあげることができる。

参照書のうち、外国語教育課程としての英語教育課程に、最も重要かつ直接の関係をもっているのは辞書である。よい辞書を持たせ、辞書を正しく使う習慣をつけるように努めれば、生徒は言語学習の初期の段階の後に、言語学習の重要な様相で

ある、外国語をひとりで読んで楽しむことを、身につけるようになる。ひとたび生徒がこの新しい仕事に成功すれば、教師のその後の仕事はだいふ楽になる。というのは、生徒は言語学習をみずから始めたわけであり、読書の興味によってますますそうする気になるからである。

最初の1・2年間の基礎学習を指導した後は、英英辞典の使用を勧めたい。英和辞典の使用によって生徒がことばの意味を誤解することがよくあり、生徒が英語を話したり書いたりするときにする誤りやこっけいな用い方は、英和辞典の使用による意味の誤認に原因のあることが多い。そればかりでなく、英和辞典では意味の細かい点がよくわからないし、第一英語の真髄に触れることはむずかしい。英和辞典の訳語は、心覚えとしてはけっこうであるが、英語の本格的学習をする場合には、全面的にこれにたよることはできない。生徒ををできるだけ英英辞典を使用する方向へ指導したい。

用例をあげていない辞書は、よい辞書とはいえない。近似語（厳密な意味での同意語はありえない）のみを載せている辞書では、ことばの意味はじゅうぶんにわからないし、また英語を母国語とする人たちがそのことばをどういうふうに使っているかということもわからない。ことばの意味は、文脈に入れてみてはじめて生きてくるものだからである。同じように、用例があってはじめて、正しい構文をはっきりつかむことができるのである。（後略）

附録Ⅱ 発音記号・抑揚符および連音の諸問題

I. 発音記号

（中略）

「南部英語」および「一般米語」という用語の説明

（中略）

Daniel Jones, *English Pronouncing Dictionary* をはじめとして、イギリスで発行されたたいていの辞書はこの種の発音を記載している。Jones はその発音辞典に記録している発音が、「public school で教育をうけた南部イングランドの人々の家庭で日常最も普通に聞かれる」種類の発音であると信ずると言っている。

（中略）

Webster 著 *International Dictionary of the English Language*（第2版）をはじめ、アメリカ合衆国で最近発行されたたいていの辞書はこの種のアメリカ英語の発音を記載している。Kenyon および Knott 共著の *Pronouncing Dictionary of American English* (G. & C. Merriam Co., Springfield, Mass., 1944) には初めに一般米語の発音（北部米語と呼んでいる）を示し、もし他の地域の変種があれば、それらを次に示している。

（中略）

上記の一覧表を作るに際しては、特にその一つを推薦する意図を持っていない。しかし従来日本にも外国にも標準的な表記法が制定されていないことは残念である。やがてすべての辞書や教科書の編集者が用いるような統一された理想的発音記号が出来ることが望まれる。

(後略)

中高共通ではあるが、教材について扱った第 6 章の各種参照書類の項中で、辞書は英語教育課程で最も重要であることに始まり、正しく使う習慣づけが独学の習慣を作り、教員の負担が軽減されること、3 学年からの英英辞典使用の勧め、用例が無い辞書は良い辞書ではないこと、に至るまで辞書の存在意義や利用価値に深く言及している。

さらに附録Ⅱ「I. 発音記号」の中の、南部英語と一般米語の違いの説明の件で、英米各国の代表的な辞書で使われる発音の種類を紹介しながら、辞書における統一された標準的な発音表記法（発音記号）の必要性を説いている。

以上のように、全般にわたって前の学年での指導計画の項を参照することを基本とし、高等学校の各学年に特化した指導内容を追加する構成になっている。まず 1 学年では、中学校で習得した辞書使用の基礎に加え、辞書中で使われる略語、音節区分、発音記号を含めて辞書使用に十分習熟すること、2 学年では類義語辞典の活用、3 学年では英英辞典の利用、そして全学年において単語の遊びを通して辞書の積極的使用、をそれぞれ促している。

2.2.3 解説書

この改訂版には、指導計画を進めていく上で手がかりとなる『中学校・高等学校学習指導法』という文部省が昭和 28 年に発行した 105 ページから成る資料が別途存在する。その外国語科英語編における辞書の記述を探してみると、「第 1 章 英語の学習における望ましい環境」の「A. 学校」「4. 設備」「a. 教科教室」で、「書棚には英語の教科書・辞書・参考書・新聞・雑誌や絵本や歌の本などを並べたいものである。」とあるほか、同「c. 図書教材」では辞

書を含めた参考書類購入の年間計画と整備を促している。「第4章 聞き方および話し方の学習指導における補助手段」の「A. 発音記号」第2項では、辞書にはどの発音記号がどのくらい使われているかを考える必要性を説いている。さらに「第5章 読み方の学習指導」のⅢに「C. 辞書の用い方の指導」という辞書使用に特化した項目がある。そこでは、語学に熟達するためには辞書が欠かせないという辞書指導の意義に始まり、補助プリント等を使ってめんどうがりがちな辞書引きの負担を軽減させる工夫、多義語から適訳を捜し出させる指導、熟語や連語の引き方（文例の活用やどの語から引くか、等）、接頭辞・接尾辞・語源の活用、といった辞書指導における基本的かつ大切な留意事項が具体例を挙げながら詳しく紹介されている。

『中学校・高等学校学習指導法 外国語科英語編』（昭和28年発行）

第1章 英語の学習における望ましい環境（pp. 5-6）

I. つくりあげる環境－A. 学校－4. 設備

a. 教科教室

（前略）書だには英語の教科書・辞書・参考書・新聞・雑誌や絵本や歌の本などを並べたいものである。（後略）

c. 図書教材

（前略）そのほか図書教材としては、ワークブック・補助教材・一般読書資料・定期刊行物・パンフレット・参照書（辞書・百科事典・年鑑など）などがあるが、それぞれ購入の年度計画をたてて整備していきたいものである。なお、これらの教材の利用については、「学習指導要領 外国語科英語編」Ⅲを参照されたい。

第4章 聞き方および話し方の学習指導（pp. 47-8）

Ⅲ. 聞き方および話し方の学習指導における補助手段

A. 発音記号

2. どの発音記号を教えるか

（前略）そして、どの発音記号を教えるかを決めるにあたっては、採択した教科書において用いられているかどうか、その他の教科書や辞書にどのくらい広く用いられているか、また、生徒にとってどのくらい学習の負担になるかなどの条件を考える必要があろう。

第5章 読み方の学習指導（pp. 63-4）

Ⅲ. さまざまな学習活動の指導

C. 辞書の用い方の指導

予習や復習にあたって、辞書を引くが必要になってくる。辞書をめんどくがらないで引くことは、語学に熟達するためのひとの条件ともいえるであろう。辞書の使い方についての各学年の指導計画は、「学習指導要領 外国語科英語編」第4章および第5章を参照されたい。

生徒はともすると辞書を引くことをめんどくがるものである。その結果は、安直な自習書などにたよることになってしまっ、語や句などをよく覚えなないことにもなる。このような傾向に対しては、新しい教材のうちで、特に問題になるような語や句をプリントしてやっ、その他の語や句を辞書で引くようにさせ、その手数を軽くしてやるのも一つの方法である。

また、せっかく辞書を引いても、どれが適訳かわからない生徒がいるものである。このような場合には、前後の語句から文のだいたいの意味をわからせて、その後どの訳語が当てはまるか一つ一つ検討していっ、適訳を捜し出すように指導することもできる。

語がやさしいと、つい見くびっ、辞書を見ないで、たいせつな熟語を見のがっ、生徒がいるものである。たとえば、*hat in hand* という語群が出てきたときに、たいていの生徒は「手に帽子を持っ」という意味だと思っであろう。そのような答えを受けつけないで、辞書を引かせてみると、「かしこまっ」というような意味の熟語であることがわかるのである。同じように、*at home* という熟語には、「在宅して」という意味のほか、どのような意味があるか、辞書によっ、調べさせてみるのも、一つの方法であろう。

生徒のうちには、語の引き方はわかるけれども句や熟語の引き方になかなか慣れないものもあるようである。これは、その数語のうちでいちばん重要な語によっ、引くことを話してやるとともに、*in front of*, *be proud of*, *depend on* などの例を出して練習することも考えられる。

また、連語（*collocation*）の場合は、文例を同時に見ておくように指導することもたいせつであろう。たとえば、*compare* という語を引いたときに *compare with* と *compare to* とは意味が違っ、*tire* という語を引いたときに、*be tired of* と *be tired with* ととも意味が違っことがわかるのである。

辞書によっ、は、接頭語や接尾語や語源などの出ているものもあるから、これらのものも見るように指導すれば、生徒は興味を持つようになるであろう。

以上のように昭和26年改訂版は、中1から高3までの各学年で行うべき辞書指導の内容が実例とともに具体的かつ段階的に示されており、教師用指導手引き兼解説書の性質を帯びている。学習指導法に関する別資料も含めて、史上最も詳細な学習指導要領改訂版といえる。

2.3 昭和31年版（同年施行）

2.3.1 概要

この年には高等学校学習指導要領のみが改訂された。基本的には昭和26年改訂版の方針を受け継いだ部分的な改訂であるが、「試案」の文字が消え、大幅に簡略化され、現在の学習指導要領の原型が出来上がった観がある。

2.3.2 「外国語科編」の構成と辞書に関する記述

前改訂版までの英米偏重の傾向が薄れ、この改訂から「外国語」という名称が前面に出ようになり、フランス語とドイツ語が追加され、初めて第二外国語（英・仏・独）が設定された。また、新語数の基準が初めて示された。

4つの章から成り、A5判でわずか42ページ分に集約された。そのうち、ドイツ語とフランス語に関する20ページ分を除く22ページ分が英語に関する内容である。第1章の目標、第2章の組織に続いて、第3章で第一外国語、第4章で第二外国語についてそれぞれ規定しているが、中学校から継続して履修する場合と（中学校では選択教科であるため）高等学校において初めて履修する場合との2つの場合に分けて指導事項が記されている点が、この改訂版における特徴の1つである。

昭和31年版外国語科編 全体構成

まえがき

第1章 外国語の目標

「1 高等学校教育課程における外国語科の位置」「2 外国語科の目標」

第2章 外国語科の組織

「1. 外国語科における科目の編成」「2. 外国語科運営上の留意事項」

第3章 外国語科第一外国語

「1 第一外国語の目標」「2 第一外国語 [1 英語 (1) 中学校から継続して履修させる15単位の場合, (2) 高等学校においてはじめて履修させる5単位の場合], [2 フランス語], [3 ドイツ語]」

第4章 外国語科第二外国語

「1 第二外国語の目標」「2 第二外国語 [1 英語 (1) 中学校から継続して履修させる15単位の場合, (2) 高等学校においてはじめて履修させる5単位の場合], [2 フランス語], [3 ドイツ語]」

前改訂版では実に詳しく示されていた辞書指導の記述が、この改訂版では第3章と第4章の第一外国語と第二外国語それぞれの「b. 読み方の分野」にわずか数行で記されるほどにまで簡素化された。ゆえに従来まで存在した辞書に特化した項目は無くなった。しかし、前改訂版の第6章で示された英英辞典の利用の勧めが、第一外国語の中学校から継続履修する場合の中で受け継がれている。辞書指導については、中学校から継続履修の場合には「することも望ましい」であるのに対し、高校で初履修の場合には「する」になっている。

昭和31年版 辞書に関する記述の抜粋

第3章 外国語科第一外国語

2 第一外国語（英語）

(1) 中学校から継続して履修させる15単位の場合

b 読み方の分野

また、学年の程度よりもやさしい言語材料で書かれたものを多く読むことや、英和辞書ばかりでなく、やさしい英英辞書や英語で書かれた百科事典の利用のしかたを指導することも望ましい。(後略)

(2) 高等学校においてはじめて履修させる5単位の場合

b 読み方の分野

読み方の分野においては、次に示す範囲内の言語材料で書かれた問答や練習を主とする文、物語、伝記、劇、詩などを読むことを指導する。また、英和辞書の利用のしかたも指導する。(後略)

第4章 外国語科第二外国語

2 第二外国語（英語）

(1) 中学校に継続して履修させる4単位の場合

b 読み方の分野

読み方の分野においては、次に示す範囲内の言語材料で書かれた物語、伝記、劇、詩、小説、随筆などの作品を読むことを指導する。また、英和辞書の利用のしかたについても指導することが望ましい。（後略）

(2) 高等学校においてはじめて履修させる5単位の場合

b 読み方の分野

読み方の分野においては、次に示す範囲内の言語材料で書かれた問答や練習を主とする文や物語などを読むことを指導する。また、英和辞書の利用のしかたについても指導する。（後略）

2.3.3 解説書

昭和31年の学習指導要領改訂に伴い、昭和26年版の指導手引き資料『中学校・高等学校学習指導法外国語科英語編』の高等学校に関する部分を改訂した『高等学校学習指導法外国語科英語編』が昭和32年に発行された。学習指導要領本編では読み方の分野にしか見られなくなった辞書の記述であるが、この解説書では「辞書の用い方の指導」の項目のほか、話し方、聞き方、書き方の各技能における辞書使用の項目も従来通り残されている。まず、「第1章 学習指導の準備」で紹介されている、新入生の中学校での英語学習実態の調査の項の1つに「辞書の引き方をどれくらい行ったか」が含まれている。また「指導計画の立案」の項では、整備すべき図書教材の1つに辞書が挙げられている。「第3章 聞き方および話し方の学習指導」の「発音記号の指導」の項では教科書や辞書に使われている発音記号を調べて活用すること、「第4章 読み方の学習指導」では予習の際に参考にすべき辞書を示すこともよいとしている。同章の「Ⅲ さまざまな学習活動の指導」に「辞書の用い方の指導」の項がある。内容は前改訂版の解説書と同じであるが、「ある期間辞書を学校に持参させていっせいに引かせて赤い鉛筆でしるしをつけさせる」「例文を説明に引用する」

「学年が進むにつれて英英辞書の引き方を指導することが必要」などの内容が追加されている。そして「第5章 書き方の学習指導」では、和文英訳の際に和英辞書の使用が望ましくない場合があることや、日記や手紙の指導では辞書に頼らずに既習の語句や文を駆使させること、など敢えて積極的な辞書使用を控えることに言及している点はこれまでの改訂版には無かった傾向である。

『高等学校学習指導法外国語科英語編』（昭和32年発行）

第1章 学習指導の準備

I 新入学生徒の実態調査 (p. 1)

1 中学校における英語学習についての調査

(6) 辞書の引き方をどれくらい行ったか。

II 指導計画の立案 (p. 6)

6 教材教具の整備

まず、図書教材としては、辞書・事典・(中略)などをあげることができる。

第3章 聞き方および話し方の学習指導 (p. 24)

II さまざまな学習活動の指導

10 発音記号の指導

発音記号を指導することに決めたら、～教科書に用いられているものや辞書などに用いられているものなどを調べ、生徒の学習負担なども合わせて考えて決める。

第4章 読み方の学習指導

II 理解の指導 (p. 39)

2 精読の指導 (6) 予習の指導

(前略) 授業時間の終わりごろに、次の時間までに予習してくる範囲を示したり、
(中略) 内容によっては参考にすべき辞書や参考書などを示してやるのもよい。
(後略)

III さまざまな学習活動の指導 (pp. 43-4)

1 辞書の用い方の指導

予習や復習においては辞書を引くことが必要であり、辞書をめんどうがらないでひんぱんに引くことは、読み方の技能を伸ばしていく条件ともなるのである。

それにもかかわらず、生徒のうちには、とにかく辞書を引くことをめんどうがって、なかなか引きたがらない者もいるようである。その結果は安直な自習書など

にたよって、語や句などをよく覚えられないでしまうことにもなる。このような傾向に対しては、ある期間辞書を学校に持参させていっせいに引かせて赤い鉛筆でしるしをつけさせたり、読み方の作品のうち、特に問題になるような語や句の説明をプリントしてやって、そのほかの語や句を辞書を引いて調べさせたり、辞書を指定しておいてその中の例文を教室の説明に引用したりすることなどが考えられる。

また、せっかく辞書を引いても、どれが適訳かわからないで困っている生徒もいる。このような場合には、前途の語や句を手がかりとして文全体のだいたいの意味を推しはかり、その全体の意味にどの訳語があてはまるか、ひとつひとつ検討していった適訳を見いだすように指導するのがよい。

語がやさしいと、つい見くびってしまって、辞書を引かないので、見当違いをする生徒がいる。たとえば、*The ball fries right over the shortstop.* の *right* を「右」、*The boy was standing hat in hand.* を「手に帽子を持って」、*He is at home in classic music.* を「在宅して」などと簡単に考えがちである。いったいやさしそうに見える語など、さまざまな意味を持っているもので、このような安易な答えは受けつけないで、辞書でていねいに調べさせる必要がある。

さらに、語の引き方はわかっているが、成句や熟語の引き方に慣れない生徒もいるようである。これは、それら数語のうちでいちばん重要な語、たとえば、名詞などによって引くものであることを話してやるとともに、*in front of*, *be proud of*, *depend upon* などの例を出して練習させるのもよい。

また、連語 (collocation) の場合は、文例も同時にしておくように指導することもありたい。たとえば、*compare* という語を引いたときに、同時に *compare ~with* や *compare ~to* など、また *tire* という語を引いたときに、同時に *be tired of* と *be tired with* など調べておくと、それぞれ意味が違っていることがわかる。

学年が進むにつれて、英英辞書の引き方を指導することが必要である。新しい語を引くのではなくて、これまでに学んだ語を引いて、その意味を明確にするとともに、同意語・類意語・反意語などの学習にも役だつことをわからせることになる。(後略)

第5章 書き方の学習指導

Ⅱ さまざまな学習活動の指導 (pp. 63-4)

4 和文英訳の指導

(前略) なお、和英辞書は、特殊な動物や植物の名称などを引くとき以外は、英語の書き方の技能に対して望ましくない影響があるので、用いさせないのがよい。

5 日記や手紙の指導

（前略）教科書や辞書や参考書なども時には参照させるのもよいが、なるべくこれらのものにたよらせないで、それまでに学習した語・句・文を用いて、どしどし書かせるようにする。

以上のように、この改訂からは学習指導要領における辞書指導の記述は最低限度に留め、従来までの教師用引きや指導法のような内容は解説書に記載されるようになり、以後この形態が今日まで続くことになる。

2.4 昭和 35 年版（昭和 38 年施行）

2.4.1 概要

この改訂から、学習指導要領は教育課程の基準として文部大臣が告示する形式になり、法的拘束性が伴うようになった。経験・児童主義から系統・教科主義の教育思想を帯びたカリキュラムに変化した。また、従来のような教科別ではなく、全教科が 1 冊にまとめられ各教科が章で割り振られるようになった。その一方で、これまで中学校用と高等学校用とが一冊にまとめられていたのが、この改訂以降では中・高それぞれ別冊子となった。以上の変更点は今日の改訂版まで続く。そしてこの改訂では外国語科が必修教科になった。

2.4.2 「外国語編」の全体構成と辞書に関する記述

A5 判冊子の第 2 章第 7 節に外国語が配置され、分量はわずか 14 ページ分まで減少した。ドイツ語とフランス語の節を除くと英語に関する内容はおよそ 9 ページ分となる。この改訂版から、各科目の内容が「言語材料」や「言語事項」などの項目ごとに示されるようになった。

辞書に関する記述は、大学進学希望者を対象とした科目である「英語 B」のみに見られる。従来までのように「読むこと」に関する項目内ではなく、第 2 款第 2 の「3 指導計画作成および指導上の留意事項」にわずか 1 カ所 1 文のみで示されるようになった。多読と英語直解力養成のために平易な英英辞書を

使用することを勧めており、従来通り読むことに付随した内容になっている。一方、基礎的な内容を扱う「英語A」では辞書については特に触れられていないが、これは科目の趣旨に則って中学校段階での初歩的な辞書使用程度に留めておくことが含意されていると思われる。

昭和35年版 外国語編 全体構成

第7節 外国語

第1款 目標

第2款 各科目

第1 英語A 「1. 目標」「2. 内容：言語材料(及び題材)，言語事項，学習活動」
「3. 指導計画作成および指導上の留意事項」

第2 英語B 「1. 目標」「2. 内容：言語材料(及び題材)，言語事項，学習活動」
「3. 指導計画作成および指導上の留意事項」

第3 ドイツ語

第4 フランス語

昭和35年版 辞書に関する記述の抜粋

第2 英語B

3 指導計画作成および指導上の留意事項

(5) 直接英語から理解する能力を養うために、学年の程度よりも平易な英語で書かれたものを多読させることや、平易な英英辞書を使用させることもよい。

2.4.3 解説書

辞書に関する記述は、学習指導要領本文と同様に解説書においても激減している。本編中では明文化されていない中学校段階における英和辞書の引き方の指導を踏まえて、英語で直接理解する能力を習熟させるために「英語B」での英和辞書利用にいつそう習熟させる必要性を説くとともに、英英辞書を利用することで既習語の定着や書く力の育成にも役立つとしている。前改訂版に続いて英英辞書の件が残っている。

高等学校学習指導要領解説 外国語編（昭和36年発行）（pp.87-8）

第2章 各科目

第2節 英語B

(5) 多読および英英辞書

（前略）

また、直接英語から理解することに習熟させることと関連して辞書があり、このことについては、すでに中学校第1学年から「英和辞書のひきかたを指導する。」としているので、「英語B」ではこれを受けて、英和辞書の利用にいつそう習熟させることが必要である。それとともに、英英辞書を用いさせることは、既習の語や句を反復させたり、整理させたりすることや、さらに書く能力を養うことにも役だつものなので、「平易な英英辞書をしようさせることもよい。」とした。

3. ま と め

ここまで、昭和22年の試案から法的拘束力を伴うようになった昭和35年改訂版までの高等学校学習指導要領における辞書指導・使用に関する記述について概観してきたが、この章ではその内容をいくつかの観点別に整理し、さらに現行の平成21年版の内容と比較する。現行版における全体構成や辞書に関する記述の抜粋の内容についての詳細には触れず、ここでは比較に必要な部分を整理するだけに留める。現行版の辞書に関する記述の抜粋を以下に示す。

平成21年版 辞書に関する記述の抜粋

第4款 各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い

2 内容の取扱いに当たっては、次の事項に配慮するものとする。

- (3) 辞書の活用の指導などを通じ、生涯にわたって、自ら外国語を学び、使おうとする積極的な態度を育てるようにすること。

高等学校学習指導要領解説 外国語編（平成22年発行）（p.55）

第4章 各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い

第2節 内容の取扱いに当たっての配慮事項(3)

外国語の学習において、積極的に辞書を活用することは、生徒の主体的な学習態度を育てる上で大切である。中学校で身に付けた辞書の使い方を基礎として、外国語を理解したり表現したりする上で助けになるような効果的な辞書の使い方を指導することなどによって、生徒が自律的な学習態度や様々な学習方法、さらには、コミュニケーションへの積極的な態度を身に付けられるよう工夫をすることが大切である。

また、生涯にわたって、自ら外国語を学び、使おうとする積極的な態度を育てるために、辞書の活用の指導に加えて、図書館やインターネットなどを利用して広く情報を収集し、活用することができるように指導することも大切である。

比較対象となる観点別に内容をまとめると表1のようになる。なお、昭和22年版では高等学校での辞書指導に関する記述が無いため、実質的には昭和26年版からが比較の対象となる。

比較をしていく前に、表の見方について簡単に解説をする。「判・頁」欄で、総ページ数の下に示された（ ）内の数字は、総ページに占める英語科を扱ったページ数であり、その中には仏語、独語、および専門教育の英語は含まれない。次に、「辞書項目がある章節と具体的文言」欄では、項目名に辞書の文字が含まれた独立項目がある場合には●、項目名に辞書の文字が無くても内容が辞書に特化している場合には○、辞書に特化してはいないがその中で辞書について触れられている場合には▲、をそれぞれ用いて、具体的な文言または概要を示している。また、表中に表示しきれない長い文言は部分的に省略している。

まず冊子の厚さと辞書に関する情報量については、試案ということもあり昭和26年版が最も詳しく、中高が別冊子になる昭和31年版以降は改訂を重ねる毎に徐々に薄くなっていき、辞書について書かれた内容も減少していく。解説書については、どの改訂版でも分量・内容ともにそれなりに豊富であるが、昭和35年版では辞書に関する項目は解説書でさえ1項目1文のみとなる。一方平成21年版では、冊子の大きさがA4判になり、辞書に関する記載が複数箇所で見られるようになるが、全体的な分量にほとんど変化はない。

表1 高等学校学習指導要領外国語科編の辞書指導の記述のまとめ

改訂 年度	指導 科目	冊 子	判・頁 全(英)	辞書項目がある章節と具体的 文言(部分要約)	指導時期 (記載部)	四技能	英英辞典	補足、 関連事項	必 選
S22	英語		A5 28	・高等学校の章に辞書の記述 無し ・全て中学校の事項がベース	中1 中2	(読)	記載なし	「辞書」でなく 「字引き」、具体的 指導事例	選
S26	英語	本 編	A5 759 (3冊)	第5章 1.～3.各学年における 生徒の経験 ● 1. B「辞書を使うこと」 第6章 Ⅱ.7. 参照書類 附録Ⅱ I. 発音記号 使用・指導ともに必須事項と して具体事例とともに基本から 発展事項まで極詳細に記載	全学年 ・1年：基本 全般を熟達 さらに加え て ・2年：多種 辞書、文型 一覧の活用 ・3年：単語 遊びで活用	1学年 読：「辞書を 使うこと」 書：略語習得 2学年 書：類語辞典 文型一覧表 の活用	・単語遊びの項 中で、定義遊 びでの使用 ・資料・参照書 類の項中で、 3学年から英 和との使い分 け勤め	・二カ国語表 記、発音記号・ 略語を知る、具 体的活用事例、 参照図書類 ・「英和辞書」 の表記 ・全て中学校段 階の指導がベース	選
		解 説	A5 105	第1章 I. A.4. a. 教科教室、 c. 図書教材 第4章 Ⅲ. A.2. のように 発音記号を教えるか 第5章 Ⅲ. C ● C.「辞書の用い方の指 導」 設備・環境、図書教材、発音 記号、用い方の指導(辞書使用 の意義、熟語検索等の活用 事例多数)	記載なし (全学年)	聞・話： 発音記号 読： 使用法指導	記載なし	日本語表記のみ	
S31	英語 (第1・2外国語)	本 編	A5 22	第3章 2(1)b. 読み方の分野 ▲「英和辞書の利用のしかた についても指導することが 望ましい」 第4章 2(2)b. 読み方の分野 ▲「英和辞書の利用のしかた についても指導する」	記載なし (全学年?)	読	2. 第一外国語、 (1)中学校から継 続履修させる場 合に、「～易し い英英辞書～の 利用のしかたを 指導することも 望ましい。」	この改訂版から、 辞書の記述は各 項1文のみに。	選
		解 説	A5 92	第1章 I. 1(6) 辞書の引き方 をどれくらい行ったか Ⅱ.6 教材教具の整備 第3章 Ⅱ.10 発音記号の指 導 第4章 Ⅱ.2(6) 予習の指導 ● Ⅲ.1「辞書の用い方の 指導」 第5章 Ⅱ.4 和文英訳の指導 5 日記や手紙の指 導 実態調査、教材教具、発音指 導、精読、用い方の指導(具 体的指導事例多数)	記載なし (全学年?)	聞・話： 発音記号 読： 使い方、基本 書： 和文英訳時、 和英辞書 不使用	学年が進むにつ れて指導が必要	・本編と違い、 比較的詳しく記 載(特に熟語検 索例)。 ・和文英訳時、 和英辞書は書く 力に望ましくな い影響があるた め使用を控える 場合もあり。	
S35	英語 B	本 編	A5 14 (9)	第2章 第7節 第2款 第2 3.指導計画作成および指導 ○(5)「～平易な英英辞書を使用 させることもよい」(1 文のみ)	記載なし (全学年)	記載なし	平易な英英辞書	・外国語科英語 は必修科目 ・英英辞書以外 の辞書の言及無し	必
		解 説	A5 150 (142)	第2章 第2節 ●(5)多読および英英辞書 ・英和にも言及 ・中1からの辞書指導を受けて、 英和使用の熟達が必要。	記載なし (全学年)	「多読」の項中 で、書く力の養 成に役立つ	書く能力養成に 役立つ	英和に加えて英 英使用を推奨	

H21	全科目共通	本編	A4 7	第2章 第8節 第4款～指導計画の作成と内容の取扱い 2配慮事項 ○(3)「辞書の活用の指導などを通じ、生涯にわたって、自ら外国語を学び、使おうとする積極的な態度を育てるようにすること」	記載なし (全学年)	記載なし	記載なし	・コミュニケーション英語Ⅱで辞書不使用指導	必
		解説	A4 112 (92)	▲ 第4章 第2節 (3) ・生涯にわたって自律的学習・積極的コミュニケーション態度の育成。 ・中学で習得した辞書使用を基礎に	記載なし (全学年)	記載なし	記載なし	・本編事項を詳しく補足。但し、具体的活用方法は無い。 ・図書館やインターネット活用	

辞書について書かれた項目をもう少し詳しく比べてみる。昭和26年版では、1学年の読み方の項中に「辞書を使うこと」という独立項目があり、それ以外にも複数個所で辞書に関する詳しい記載がある。解説書にも「辞書の用い方の指導」という独立項目があり、本編と同様に他の箇所でも辞書について触れられている。昭和31年版からは、本編では項目名に辞書の文字がついた独立項目は無くなり、読み方の分野の1項の文中で触れられる程度になり、基本的に1か所、1項目、1文のみである。一方解説書では「辞書の用い方の指導」という独立項目が存在し、それ以外でも辞書について触れられた項目が多数あり、中でも和文英訳時における和英辞書不使用の勧めは注目に値する。昭和35年版からは、読み方の分野ではなく、当該科目のまとめのような位置づけである「指導計画作成および指導上の留意事項」内の1項として記載されるようになる。以後の改訂版でこの様式が踏襲される。昭和35年版では、英語Bの「指導計画作成および指導」の第5項の文中での英英辞書の使用の勧めが唯一の辞書に関する文言である。一方解説書では「多読および英英辞書」という独立項目があり、本編では記されていない英和辞書にも言及している。しかし昭和31年版までとは違って、この項以外では辞書についての記述は全く見られなくなった。平成21年版では、当該科目のみではなく、英語全科目共通の「指導計画の作成と内容の取扱い」の配慮事項の第3項で、辞書の活用が生涯学習、自律的学習、および積極的コミュニケーション態度の育成と関連付

けて述べられており、昭和 35 年版までと比べると内容面で広がりを見せている。これに関して解説書では詳しく補足がなされているが、辞書の具体的な活用方法や事例などは見られない。

次に辞書指導の対象学年について見ると、昭和 35 年版までの全ての版では、中学校段階での初歩的な辞書指導を踏まえることが本編あるいは解説書のどこかで明記されている。そのため、辞書に関する文言が見られない学年においても、実質的には辞書指導を行うことが前提になっていると考えて差し支えない。学年が明記された事項があるのは昭和 26 年版のみで、1 学年で基本的な辞書使用に十分に熟達すべきとし、2 学年以降ではそれを踏まえた発展活用を勧めている。しかしその解説書では学年に関する記述は無い。昭和 31 年版以降は学年ではなく科目が単位となり、当該科目が教えられる学年がすなわち対象学年ということになる。例えば、昭和 35 年版では英語は必修で毎学年継続して履修させることが前提であることから、全学年が事実上の対象学年になる。昭和 31 年版では毎学年継続ではないため、表中では「？」が付記されている。現行版では全英語科目共通事項として辞書の活用の指導が示されているため、事実上全学年が指導の対象ということになる。

四技能との関連に注目すると、どの改訂版でも読む分野との関連で登場する。話す分野と聞く分野は、発音記号の習得に関する内容で、昭和 26 年版と昭和 31 年版の両解説書で見られる。書く分野については、辞書で使われる略語の習得と類語辞典の活用（昭和 26 年版）と、和文英訳時に和英辞書を使用しないこと（昭和 31 年版解説書）のみであった。現行版では四技能に関する記述は無いが、これは四技能を統合的に扱うという全体基本方針があるためであろう。

最後に英英辞書の記述に着目すると、昭和 26 年版では、辞書の具体的使用例を紹介した附録と参照書類の項にある。解説書では英英辞書には触れられていない。昭和 31 年版では、第一外国語で中学校から継続履修の場合に、その使用を指導することが望ましいとし、その解説書では学年が進むにつれてその

引き方の指導が必要としている。昭和35年版では、先述の使用の勧めの件のみである。解説書では、既習語句の整理・復習と書く能力の養成に役立つとしている。平成21年版では、本編、解説書ともに英英辞書の記載は全く無い。

以上、昭和22年版から昭和35年改訂版までを現行の平成21年版も含めて辞書に関する記述の変遷を比較検証してきた。戦後の新教育制度開始と同時に試案が作成され、試行錯誤を繰り返した末、法的拘束力を伴う昭和35年版になって記述の内容や形式が定まってきた感がある。改訂を重ねるたびに全体の減量化とともに辞書に関する記述も簡略化される一方で、解説書ではそれなりに内容が充実している。また、高等学校では中学校段階での基本的な辞書指導を前提としている点が多いこともあり、辞書について詳細には明文化されていない（される必要が無い）とも考えられ得る。これらの点を踏まえたうえで、高等学校における辞書指導の在り方について、本論では扱わなかった昭和43年改訂版以降も含めて全体的な変遷を辿って、改めて検証してみる必要がある。それについては次論の2回目で総括し、さらなる考察を試みる予定である。

参 考 文 献

- 戦後教育改革資料研究会（1980）.『文部省学習指導要領 外国語科編 20.（1）,（2）』日本図書センター.
- 寺嶋健史（2012）.「中学校学習指導要領（外国語編・英語）に見る辞書指導に関する一考察」『松山大学論集』23（5）, 173-194.
- 文部省（1947）.『学習指導要領 英語編（試案）』教育図書.
- 文部省（1952）.『中学校高等学校 学習指導要領 外国語科英語編（試案）Ⅰ～Ⅲ』中央書籍株式会社.
- 文部省（1953）.『中学校高等学校 学習指導法 外国語科英語編』, 中村紀久二監（1991）.『文部省学習指導書 第26巻』大空社.
- 文部省（1955）.『高等学校学習指導要領 外国語科編』清水書院.
- 文部省（1957）.『高等学校学習指導法 外国語科英語編』開隆堂出版.
- 文部省（1960）.『高等学校学習指導要領』大蔵省印刷局.
- 文部省（1961）.『高等学校学習指導要領解説 外国語編』開隆堂出版.

高等学校学習指導要領（外国語編・英語）に見る辞書指導に関する一考察
(1)昭和 22 年試案から昭和 35 年改訂版まで

125

文部科学省（2009）.『高等学校学習指導要領』 東山書房.

文部科学省（2010）.『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』 開隆堂出版.